令和元年度第１回岡崎市少年愛護センター運営委員会

日　　時　　令和元年７月 17 日（水）　午後２時
会　　場　　岡崎市役所西庁舎　５階　501 号室
出席委員
委 員 長　　石　川　　優　（岡崎市社会福祉協議会長）
　　平　松　文　子（岡崎市民生委員児童委員主任児童委員連絡会会長）
　　本　多　順　子（学区女性団体代表（本宿学区代表））
　　成　瀬　眞佐子（岡崎少年愛護センター地域指導員）
　　佐　藤　正　和（子ども会育成者連絡協議会事務長）
　　永　野　光　雄（岡崎市小中学校現職研修委員会生徒指導部長（矢作中学校長））
　　伊　澤　　勉　（岡崎市小中学校現職研修委員会生徒指導部長（福岡小学校長））
　　田　中　宏　明（県立高等学校生徒指導部代表（岡崎高等学校教諭））
　　吉　田　　修　（岡崎警察署生活安全課長）
　　林　　優　子（一般公募）
　　宮　澤　会美香（一般公募）
欠席委員　　天　白　真　順（私立高等学校生徒指導部代表（岡崎学園高等学校教諭））
　　安ノ井　宏　隆（西三河福祉相談センター児童育成課長）

事 務 局　　中村　耕　社会教育課長、柴田　英代　社会教育課副課長
　　社会教育課社会教育係　　大村、中村、福田
　　少年愛護センター　　大山、浦野

議　　題　（１）平成 30 年度　活動状況について
　　（２）令和元年度　活動計画について
　　（３）最近の事例について

（１）平成 30 年度　活動状況について

配布資料に基づき、愛護センター職員より平成 30 年度の活動状況を説明。

192 名の指導員の協力の下、青少年の非行防止・愛護善導の補導活動を行った。１年間の回数は 554 回、場所は 3,308 カ所、補導した少年の数は 2,387 人。「愛の一声」を基本とした少年への声掛けが基本だが、喫煙や怠学行為等の少年は家庭、学校等へ通報連絡した。（通報連絡した少年の数　６人）

近年、未成年の喫煙を現場で指導するケースが大変減少しており、昨年度は０件であった。

少年相談は、来所による相談が 16 件、電話による相談が 30 件あった。相談者の６割が母親で、相談対象者のおよそ３分の２は小中学生であった。相談内容のうち最も多かったのがしつけなど、家庭での子どもへの対応についての相談で、

不登校、登校しぶりの相談がそれに続いた。

少年愛護センターでは、街頭補導、少年相談のほかに、児童・生徒の安全を守るために、不審者被害情報の迅速な伝達や取りまとめを行っている

（２）令和元年度　活動計画について

配布資料に基づき、愛護センター職員から令和元年度の活動計画を説明。

街頭補導は年間で577回､指導員は延べ2,875人あまりの動員を予定している。センター補導では大型ショッピングセンター・ゲーム場・公園などを巡回補導する。夏には遊泳禁止の河川を巡回するなど、時期等に応じて臨機応変に巡回場所を変えている。学区補導では、学区の実情に応じた巡回活動、および民生委員・主任児童委員と生徒指導担当教諭の情報交換を行う。

その他、来所および電話による相談活動、不審者被害状況の集約と情報提供を行うほか、スクールソーシャルワーカーとの連携も図っていく。

相談者の中には、直接学校や専門機関に連絡を入れることに躊躇して愛護センターに電話してこられる方がいるが、そうした相談者には、愛護センターが間に入って援助や助言をしている。

今年度の被害情報は、６月末現在 20 件ほどで、昨年の同時期に比べると減少傾向だが、内容は、不審者、痴漢、露出などに加え、小学生の連れ去り未遂や刃物を持った不審者など、悪質な内容の報告が増えている。５月には川崎市で刃物を持った不審者に切りつけられ、２人が死亡１７人の児童がけがをするという凄惨な事件もあったので、今後も警戒を継続していく必要がある。

街頭補導の様子は、全体的に落ち着いて静かな印象を受ける。しかし、テスト週間などにおける高校生のフードコートでの学生たちの飲食行為が長時間になることがあるという情報も受けている。大型店舗では殆どの店で警備員を配置しているが、万引き被害についてはあまり減少していない。

中高生ではスマホのトラブルが多いと聞いており、愛護センターへの相談内容でもスマホによる他人へのなりすましや、誹謗中傷、個人情報の流出などが原因でトラブルになり、その対応に悩んでいるケースが増えてきている。

学区補導では、中・高校生の自転車のマナーに問題があるという報告を受けている。ノーヘルでの乗車やスピードの出し過ぎなどが目立っている。

（３）最近の事例について

今年度の街頭補導の事例について、それぞれ委員の立場からの意見交換を行った。

【事例】

事例について説明

【意見】

・引きこもりがちな子を外に連れ出そうと努力したお母さんの気持ちに共感してあげると親御さんも聞く耳を持ってセンターの方にも足を運ぶ可能性も高くなるのでは。

・学校に行くことをためらう子どもの声を聞くことのできる態勢や声かけが大切になると思う。小中にはソーシャルワーカーの先生がいるが、学校を卒業した

り辞めてしまったりした子どもたちが行くことのできる場所があればいいと思う。

・知り合いに引きこもり経験のある若い人がいるが、現在は短時間ではあるものの外で働くことができている。余裕がないように思える場面もあるが、一生懸命やっているので、今は見守っている。

・引きこもり状態の子が学校にも何名かいる。またそういった子の殆どがオンラインゲームで見知らぬ他人と繋がっており、ゲームの中に自分自身の居場所、存在価値を見つけている。ゲームを取り上げると暴れてしまう子もいるので、対応が難しい。

・不登校になる子は成長する過程で何らかの問題を抱えていることが多く、学校生活に不適応を起こしているように思う。最初は両親など身近な人が引っ張り出して世界を広げていけば、時間はどれだけかかるか分からないが、独り立ちする道が開けていくのではないか。

・子どもの人数の少ない地域での事例として、同級生がおらず一人きりなので学校に行けなくなってしまったという子もいる。朝も起きられなくなり、起きられないから休む、休んでいるから勉強もどんどん遅れ、分からなくなって嫌になってしまうという悪循環に陥っていた。環境を変え、近所の友達ができたことにより、今は学校に行けるようになった。

寄せられた貴重な情報や意見を、今後の街頭補導や少年相談で活かし青少年の健全育成に繋げていく。